

第6回揖保川流域委員会 議事録（概要）

日 時：平成15年4月14日（月）14時00分～17時00分

場 所：龍野市はつらつセンター 3F 多目的ホール

出席者：委員18名、河川管理者2名、傍聴者34名

1. 新委員の選出

櫛田泰三委員（前揖保川漁業協同組合組合長）から委員辞任願が提出されたことを受け、新しい委員の選出について審議（非公開）されました。新委員として藤岡健司氏（現揖保川漁業協同組合組合長）が推薦され、本人の了解を得て委員として選出されました。

2. 分科会からの報告

治水・利水・自然環境分科会まとめ役の道奥委員、流域社会分科会まとめ役の田原委員、情報交流分科会まとめ役の中元委員より、提言に向けての分科会からの報告があり、説明に関する質疑応答が行われました。

委員からの主な発言（各分科会からの報告内容は、委員会資料を参照）

< 治水・利水・自然環境分科会への質問 >

治水の基本的な考え方として「将来的には100年に1回程度の洪水を計画の対象とすることを視野に入れながら」とあり、「河川整備は今後20～30年間におおむね実現可能なものとする」ともある。何年に1回の洪水に対応するかということについては分科会で意見交換等があったのか。

（委員による回答）20～30年の間に整備可能なシナリオを考えた場合、100年に1回というような大きな洪水まで到底実現できない。長期的なプランの中での20～30年間の整備と、20～30年でひとまず工事を終えて次の整備を考えるのとではそのあり方が変わってくる。例えば、ダムの問題が議論になったが、今後20～30年間でダムの建設はできないので、そういうことを議論する必要もなくなる。しかし、長期的な計画としてやる場合とやらない場合、例えば堤防の幅や引堤の引き方も変わってくる。たとえ今後20～30年の計画ではあっても、全体計画の中で位置づけを念頭に置く必要があるという議論がなされた。

治水の基本的な考え方で「将来的には100年に1回程度の洪水を計画の対象とする」とあり、各種の洪水対策として「規模の異なる複数の対象洪水、例えば生起確率が1/10、1/30、1/50、1/100」とあるが、この整合性はどうかとらえればよいのか。また、今回のまとめは100年に1回程度の洪水を想定しているのか。

（委員による回答）100年に1回程度の洪水に対する治水対策が完了するのが100年なのか、500年なのかを算定・推定することはできていない。当然、今考えようとしている20～30年の整備よりはるかに大きな規模で、将来的には考えていかなければならない。20～30年の間に完了する河川整備が完了しても、河川の安全性は十分でないと考えられる。また、各種の洪水対策の項で書いた1/10、1/30、1/50、1/100という数値は、異なる規模の雨が降った場合に、どれくらい被害の大きさが違うのかを測るケースとして設定しており、こういう規模の洪水に対して、どれくらいの氾濫が起きるのかということ、河川管理者の方に検討していただきたいということを示している。

< 情報交流分科会への質問 >

今後20～30年の計画では災害を完全に食い止める方策を講じることは難しそうだが、水があふれたときの情報伝達によって被害を低減、軽減することが期待できる。特に浸水を前提とした治水ということになると、緊急時の情報が非常に重要になると思うが、そういう情報について

の議論はあったか。

(委員による回答) 緊急時の情報発信についての議論はあったが、河川管理者から地方自治体へ流す現状の情報伝達の仕組みについての問題点等までは言及していない。今の情報伝達システムに問題があるというようなことがはっきりしてくれば、それに対する改善案も考えていかなければならないと認識している。

3. 治水に関する情報提供

治水に関する情報提供として、河川管理者より以下の説明があり、質疑応答が行われました。

揖保川浸水想定区域と河道対策について

- ・ 既往洪水による氾濫シミュレーション
(昭和45年8月洪水、平成10年10月洪水を対象とした氾濫解析結果)
- ・ 現況河道の流下能力
- ・ 河道対策内容

委員からの主な発言

浸水面積は本川からあふれて浸水している部分の面積なのか。

(河川管理者による回答) 今回示した洪水のシミュレーションは、本川が破堤したとき、あるいは支流で直轄管理しているところが破堤したときを想定している。支流で直轄管理区間の上流が破堤するといったことは想定していない。

揖保川本川と栗栖川の合流点のところでは栗栖川の方が本川より水位が低いため浸水しているのではないかと感じられる。また、一宮町では過去10年に2回ほど床下浸水・床上浸水している。こういうところで、なぜ早急に対応できないのか説明していただきたい。

(河川管理者による回答) 栗栖川と、一宮町内の揖保川とは非常に状況が似ている。河川の整備にあたっては、どちらかというところが密集しているところを視野に入れて、下流部から順次整備してきており、その中で、優先順位として整備が遅れてきたということである。現状では一宮町と栗栖川で堤防の改築を始めているところで、山崎町から上流は、これから事業が順に動いていくと思っている。

河道対策の内容の昭和45年洪水への対応として低水護岸がメニューにあがっているが、具体的にはどのような内容か。

(河川管理者による回答) 河道を確保するうえで、低水敷を拡幅するということである。今回検討した対象洪水として、昭和45年8月の洪水がおおむね30年に1回程度の洪水、平成10年10月の洪水がおおむね10年に1回程度の洪水となっているが、何を基準としているのか。また、1日の降水量が何ミリだったのか教えていただきたい。

(河川管理者による回答) 非超過確率と言って、過去の洪水における竜野地点の流量を大きい順に並べ、30年に1回、あるいは10年に1回の確率で起きるということである。竜野地点の流量は昭和45年で $3,017\text{m}^3/\text{s}$ 、平成10年で $2,349\text{m}^3/\text{s}$ であり、昭和51年の洪水は $2,256\text{m}^3/\text{s}$ で戦後3番目の大きさとなっている。また、総降水量は、継続的に降り続いた昭和51年が最も多く607mm、昭和45年が190mm、平成10年が107mmとなっている。

以前示された昭和45年と昭和51年の実際の浸水状況図を見ると、明らかに昭和45年の方が浸水が少ない。一宮町の土砂崩れで3名亡くなるなど昭和51年の災害の方が被害が非常に大きかった。

(河川管理者による回答) 昭和51年の洪水は雨が長時間降り続いたため、内水の方が大きく、結果として浸水区域が多くなった。一方、今回示したシミュレーションは、どこか1か所の堤防が切れたとき、そこから水があふれ出ることを想定したもので、いろいろなところで破堤することを前提にして包絡的に示している。結果的に大きく見えているが、実際にはその部分的

な浸水が発生するということである。

河口部では、海の潮位の高低によって水をはける量が異なる。昭和51年の浸水は確かに多かったが、それが揖保川の流量によるものなのか、高潮によるものなのかは判断できかねる。

昭和45年の洪水が戦後最大で、次が平成10年となっているが、昭和51年の災害は一宮町で抜け山(土砂崩れ)の被害が出るなど世界的にも珍しい大災害であった。地元の人々の記憶においても、一番恐怖を感じたのは昭和51年の災害である。100年に1回もないようなことが昭和51年の災害で起こっており、もっと研究し、検討してもらいたい。

4. 提言に盛り込む内容について

「2」の分科会からの報告を受け、委員会からの提言に盛り込む内容について討議され、次のことが決まりました。

- ・各分科会から報告された提言に盛り込む内容に関して各委員の意見を再確認し、5月の集会における住民の意見を聴いた上で、提言の原案として集約する。
- ・提言の原案は、藤田委員長と、分科会まとめ役の道奥委員、田原委員、中元委員が中心になって作成し、委員会で検討する。

委員からの主な発言

揖保川の本流の井堰の中で適法でない井堰の名称と、適法である井堰の名称の一覧表を出していただきたい。適法でないものは、本来川にあってはいけないう構造物であり、全額国の補助で早急に見直すべきだと思う。

包括的に見て個々の事業が提言に照らし合わせた場合に矛盾をきたしていないというような、ベースになる一つのものさしのなとらえかたで提言をつくった方がよい。あまり具体的になりすぎると、提言の本来の機能を発揮できなくなる。

昭和45年規模の洪水への対策の概算事業費が約800億円、平成10年の場合約500億円という規模をイメージとしてつかむことができたが、10年に1回の洪水を安全に流すための整備だけでも、30年よりももっと時間がかかるような事業規模だと思う。今後、例えばこういう対策を取った場合にはこれぐらいの被害になり、そのための概算事業費はどれぐらいなのかということの説明していただきたい。そうすれば、治水対策で例えば重点的に堤防のない空間から整備するか、狭窄部の引堤規模、あるいは掘削規模などももう少し具体的な提言が出せるのではないかと。そういう方向の解析を付け加えてほしい。

緊急時の情報の問題についての議論が必ずしも十分ではないと思う。例えば情報伝達と言っても、ハザードマップを作っただけでは避難行動計画は何ら立てられず、実際に機能するようなかたちにはならない。提言の中でも、もう少し緊急時の情報伝達についての言及ができればと思う。

上流域は無堤の場所が多く、そういうところを今後の整備計画の中でどう盛り込んでいくかということも、討議していきたい。

募集された住民意見を見ると、森林、上流、保安林といった言葉がたくさん出ている。直轄管理区間外でも集水域全体を流域と考えてよいのではないかと。

直轄管理区間外については、当然河川管理者だけでなく、周辺市町などの自治体とも関連してくるので、連携をしていくというような提言になるのではないかと。

「河川横断構造物に設けられた魚道には、魚類の遡上に問題があるものもあり」というところは、「魚道を付けられてないものも非常に多い」というように、はっきり提言として採用していきたい。また、「自然環境に配慮した整備事業を」という文章は、「配慮」ではなくて「考慮」としたい。

「河川における生物生息空間の確保」のところは個々の事業の具体的なことに言及しすぎており、この部分はもう少し総括的に提言していきたい。

河原の植生には遷移という概念があるが、それに加え、例えば1年に1回の洪水、30年に1回の洪水で全部植物が流されて裸地になり、また次が新たに生えてくるという動態とか更新というシステムを持っていた。理由はまだ定かではないが、水の富栄養化、あるいはダムによる土砂の供給の減少、ピークカットされ大きな洪水が来なくなって植生が破壊されることなくなるといったことが起こり、河川本来の動態や更新がうまく機能していない状態となっている。そのあたりを考慮しながら、生物の生息空間を確保していくことを提言していきたい。

生態においても治水に対応するような検討を行った上で河川を整備していくということをつけ加えていきたい。低水路拡幅によって、水深が浅くなって平滑化すれば多様性の少ない植生にしかならないとか、逆に、河道に少し淵を残して整備すれば多様性の高い群落ができるとかいうことについて検討できると思う。

5. 「揖保川を語り、生かす集い」について

「揖保川を語り、生かす集い」について説明が行われ、開催要領の確認が行われました。審議の結果次のことが決まりました。

- ・集会の名称は「揖保川を語り、生かす集い」とする。
- ・揖保川流域委員会の活動説明及び集いのまとめを藤田委員長が行い、意見発表・質疑応答・意見交換の進行は、道奥委員(網干会場)、中元委員(山崎会場)、田原委員または浅見委員(龍野会場)が行うこととする。
- ・それぞれの会場で、必要に応じ、委員、河川管理者からの話題提供を行うこととする。

委員からの主な発言

揖保川に対する住民の関心が薄いことは、基本的には情報を提供してこなかったことが大きな問題だと思う。今回の集いでも情報を共有した上で、議論を進めていくやり方がよく、それぞれの会場でテーマについて委員が話をし、同時に河川管理者の方から工事について、長期的な気象の変動について、洪水の確率について、といった情報を提供し、それを聞くことにより、そこから新たなものが出てくる可能性がある。勉強会も兼ねてやる必要があると思う。

人前で意見を発表するなんてできない、ましてや文章なんか書けないという人は多いと思うが、そういう人の中にも何か揖保川に対する思いを持っているという方がおられる。文章にできなくてもキーワードで表し、揖保川の気に入っているところや、日ごろから生活している上で気になるところを書き出し、キーワード的なものを抽出し、それをつなげていくことでワークショップのようなものができればよりよいと思う。

地域住民にとっては毎日住んでいるから、逆に気づいていないところが多くあると思われ、反対に「揖保川ってすごいな」と外部の人に言われて初めて気づくこともある。当日来られた方から少なくとも一つは揖保川についてのメッセージを書いてもらうようなやり方ができるのではと考えている。

現在、井堰として水力発電の井堰、農業の頭首工等があるが、河川法で決められた水量が流されていない井堰が多いと思われる。既得水利権や法律について見直す時代が来ているのだから、今回の集会はそういう説明をする場ともしていくべきである。

揖保川に井堰をつくり農業用水を取るようになったのは、山崎では条里制の田ができた時期からで、千何百年の歴史がある。その歴史の中で、田に水を引くのは、中(夏至)から彼岸と決まっており、その間はいかだ、高瀬舟が通っていた。しかし近年では水利権ができ、一年中川の水を止めている状況であり、秋の彼岸が来たら水落としを上げるようにすればいいのではないか。